

---

# **ネギま！ 禁じられた魔法を統べる者**

千日紅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネギま！ 禁じられた魔法を統べる者

### 【Zコード】

Z2145BA

### 【作者名】

千日紅

### 【あらすじ】

普通の魔法よりも巨大な力を持つ『禁断魔法』。その魔法を制御する青年は、やがて「立派な魔法使い」を夢見る天才少年と出会い、『禁断魔法』と向き合うこととなる。

## 第1話 平和が崩れた日

信じられなかつた。

ありえないと思ひたかつた。

『アレ』を無闇に使おうとする奴なんて、いないと思っていたのに。

「マダ残ツテイタカ…愚力ナ人間ヨ……」

『アレ』が宿つた闇が俺を捉える。

恐い。逃げたい。『アレ』は、危険だ。

しかし、いつもいつも親から言っていた言葉が、俺を逃さなかつた。

忘れるな、お前は『パンドラ』だ。『触れてはならないもの  
を統べる者』なのだ

そう、俺は『パンドラ』。

人の欲望から『アレら』を封じ、管理し、統べる者。

己に課せられた大きな責任 今それを果たさずに、いつ果たす  
といつのだ。

「 Nos autem eorum futurum si  
t verum mundus MINERVA (我、唯己が為に

未来、真理、世界を紡ぐ)「

震える声で始動キーを口ずれる。

この言葉の通り、俺がやるのは誰のためでもない  
を生きるため。

俺が、明日

俺が、生きる理由を創るため。

そのためなら、いかなる痛みも甘美こよみ。

今、『アレ』を封じる」といふ、俺が生まれた理由なのだから。

## 第1話 平和が崩れた日（後書き）

オリジナル小説を放り出してやつてしましました。

出来れば、暖かい目で見てください。お願いします。

あと、始動キーのラテン語ですが、翻訳サイトで翻訳したものなので間違っていてもスルーしてください。

重ね重ね、お願いします。

## 第2話 麻帆良学園にて

日本にある麻帆良学園都市。その中でも最奥にある女子校舎。現在は昼休みのため、生徒たちが思い思いに過ごす中、職員室でひとり深々と溜息を吐く青年がいた。

名をパンドラ・リンドヴルム。魔法先生のひとりであり、理科を担当する教師である。

19歳でありながら群を抜く秀才であり、同時に魔法使いでもあった。

イギリス出身の彼が、何故日本の学校で教師をやっているのかというと

「何か悩んでいるのかい？ パンドラ君」

「……高畠先生」

薄い微笑を浮かべ彼に声を掛けてきた渋いオジサマ 2-A担任で英語担当教師、タカミチ・T・高畠のおかげなのだ。

10年前、ある事件で家を失った彼を、偶然知り合った高畠が引き取つたのだ。

「ああ…大変申し上げにくいことなのだが、どうにも2-Aの授業だけが上手くいかなくて。もう就任してから2年経とうとしているのに情けないことだと……」

高畠から若干目をそらしつつ話す。彼が担任を務めるクラスへの愚痴を言うなど失礼にもほどがある、ということと同時に、自分自身副担任をしているクラスが一番上手く授業が出来ないなどただの恥にほかならないからだ。

「まあ、あのクラスはいろいろと特殊だからね……」

「そう、特殊なのだ。あのクラスは、

忍者やピエロ、ロボットに魔族と人間のハーフ、果ては吸血鬼の真祖。

もちろん普通の人間も存在しているのだが、彼女らはどうにもほつ

ちやけていて、なかなか授業が上手く進まないのだ。

「特殊といつても、あそこまでいくと珍獣園だ」

ぼそりと呟いたパンドラの言葉に高畑は苦笑する。彼は手にしていた茶を啜ると、次いで話を変えた。

「今日の放課後は小テストの補修だと聞いたぞ。大丈夫かい？」

「いいえ…また2・Aバカ五人衆の相手だ。あいつらは私をおちょくっているのだろうか…」

「アスナ君は素で出来ないから、なんとも断言しないにいいね」

神楽坂明日菜。

綾瀬夕映。

佐々木まき絵。

長瀬楓。

古菲。

クラス別成績で万年学年最下位の2・Aの中でも特に成績の悪い五人。ゆえに、バカレンジャー。

その中で綾瀬はやればできるのだが、結局やらないので結論は一緒なのだ。

はあ、と再びパンドラが深い溜息を吐くと、昼休みの終わりを告げる予鈴が鳴った。

「じゃあ、僕は次授業だから、行くよ

「…すまない。愚痴に付き合わせてしまった」

「気にするな。頑張れよ」

颯爽と職員室を高畑は後にする。

その姿勢のいい後姿を見ながら、パンドラはもう一つ、深い溜息を吐いたのだった。

### 第3話 バカレンジャーと放課後

放課後、気乗りはしないがこれも教師の仕事だと自分を納得させ、  
2・Aの教室へと赴いたパンドラ。

今日の居残りはバカレンジャーの五人と龍宮真名、桜咲刹那。

「さて、さつさと追試始めるぞバカ五人衆とプラスアルファ。いつも通り10点満点中6点で合格だからな」

宣言し、用意してあつたプリントを手渡す。

すると、龍宮と桜咲、綾瀬があつと言ひ間に持つてきた。

さらつと採点をすると三人とも10点満点。

綾瀬はいつもの如く小テストはやる気が無く勉強しなかつたから落ちたに違いない。

だが残り一人は成績優秀とはいがむとも一通り点は取れていたはず  
さては、また仕事とかで勉強をしなかつたな。

「三人とも合格。だが龍宮と桜咲は残れ」

「……」

「う”つ」

すたすたと退室していく綾瀬。プラスアルファ組はパンドラの言葉  
に頃垂れた。

その後、長瀬と古が提出。

長瀬は7点、古は5点だった。

「長瀬合格。帰つて勉強しろ」

「まあ、善処するでゴザる

「やれ。 古、お前は不合格だ。もう一回」

「そんなんツー？ うう…次こそ合格アル！」

小テスト本番前にそのやる気を出せばいいものを。  
軽く溜息を吐き、別バージョンのプリントを渡す。

今度は佐々木、神楽坂、そして再チャレンジの古が出してきた。

「佐々木4点、神楽坂3点、古6点」

「え！？」

「うそつ」

「やつたアル～！」

嬉々として古は帰つて行き、若干落ち込みながら佐々木と神楽坂は再び問題に取り組む。

10分ほどの間のあと、佐々木が提出。

「どーですか、センセ？」

「　　8点、合格だ。お前ももつと勉強しろ」

「こやはは～。気が向いたらね～？」

そう軽やかに笑つて佐々木も帰つた。

残るは一番の難関　　2・A一のバカ、神楽坂明日菜。

「どうだ、神楽坂」

神楽坂の手元を覗き込むと、パンドラは一瞬硬直した。

「…お前、白紙かよ」

ギッと涙目になりながら神楽坂は呆れる青年教師を睨んだ。  
「まったく…ヒントをやるから、やれるところまでやつてみろ」  
それから30分後、ようやく神楽坂も合格し帰つていった。

気疲れが襲つてくるが、まだやることが残つている。

「　　さて。何故私がお前たちを残したのかは、当然分かつているんだろうな？」

教室に残つている一人　　龍宮と桜咲は素直に頷く。

「お前たちの仕事柄、忙しいのは私も承知している。だがそれでも学生というものは勉強が本分だ。よつて、今度小テストで不合格だった場合、次の試験まで強制的に仕事は休業にさせる」

「な…！　それはさすがに勝手というものではないですか、先生！」  
桜咲が声高に抗議するが、パンドラは淡々と返す。

「こ」の話についても学園長も高畠先生も承認している。言つただろう？　学生は勉強が本分だと

龍宮はわずかに目を鋭くしてパンドラを見据える。

「それなのに勉強ができない、しないことを仕事で言い訳をするの

は本末転倒だと そう言いたいのか?「

「その通り」

視線での抗議も意に介さず、パンドラは座っていたパイプ椅子から立ち上がり、黒板の文字を消す。

龍宮はマイペースな教師に、なおも声を掛ける。

「先生。だとしたら私たちは今すぐ困った状況にあるのだが」

パンドラは無言で続きを促す。

「これから私たちは仕事なのだが」

転けて黒板消しを床に落とす。舞い上がった粉で彼は盛大にむせた。

「じほつ、じほつ…。な、何!？」

むせながら驚いている間に、律儀にも桜咲は黒板消しを拾い、教壇の上に置くと、箋とちりとりを持ってきた。

粉を掃き集める桜咲を尻目に、龍宮は説明を続ける。

「パンドラ先生も知っているとは思うが、明日2・Aは高畠先生の英語の授業で小テストがある。しかし私たちはこれから魔物退治に出かけなければならない。そして仕事があると私たちは大抵2時頃にならんと帰つてこれないんだ」

「けほ、だから、何だと?」

「パンドラ先生に助力をお願いしたい」

突然軽く眩暈がしてふらつく。なんとか体勢を立て直すと、龍宮を見返した。

「…それは、本気で言つているのか?」

「無論」

なんといふことだ。

パンドラは未だに少しふらつく頭を押さえて心の内で悪態を吐く。まさか自分でこんな面倒な事態を招いてしまつとは――!

しかし生徒に「やれ」と言つておきながらひじで引き下がつては、教師として示しがつかない。

「 分かった。私も協力しよう」

ようやく眩暈が収まつた顔を上げ、自分を面倒事に巻き込んでくれ

やがつた生徒一人を見据えて言った。

## 第4話 太刀と魔法と拳銃と

生徒一人の仕事に協力することになり、やつて来たのは麻帆良学園から10キロほど離れた林。

既に午後7時を過ぎており、暗くなっていた。

「先生、魔物を直接叩くのはわたしたちがやりますので、援護をお願いできますか？」

「もちろんだ。任せろ」

桜咲は野太刀、龍宮は拳銃を構えた。

龍宮は何も持っていないパンドラに問う。

「パンドラ先生は杖とかを使わないのか？」

「杖はただの補助道具だからな。私は特に必要としない」

「魔法使いといえば杖、というイメージがあるが、魔力があり呪文を唱えられれば、魔法を使うことが出来るのだ。

会話をしている間に人ならざる気配が集まってきた。

「お出ましのようだな。桜咲、龍宮、準備はいいか？」

「問題ありません」「ああ

「では いくぞ！」

木陰から異形 魔物が飛び出してくる。

桜咲は一振りで三体を切り裂き、龍宮は拳銃で次々と撃ち抜いていく。

「Nōs autem eorum futurum sit v  
erum mundus MINERVA  
Fluxa atque frangit Nullam se

（脆く儂い我が身を護れ）、『安らぎの園』！

頭上から飛びかかってきた魔物たちを防御魔法で弾く。

更に、無詠唱で氷の矢を五本飛ばし、五体を貫いた。

その間に桜咲と龍宮は数十体も倒しているのだが、魔物たちは次から次へと出現していく。

「なんでこんなに魔物がいるんだ！？ 誰かが召喚でもしているのか！？」

真っ正面から突撃してきた約十体の魔物を再び『安らぎの園』で弾く。

「くつ…分かりません！ ですが、恐らく今周囲にいる一十体ほどで終わりかと思います！」

「おいつ、パンドラ先生！ 何か敵を一掃できるような魔法はないのか！」

「援護しろと言ったのはお前たちだろ！？」

龍宮のセリフに腹を立てたが、確かに状況は不利だ。

「仕方ない」で使いたくはない だが、自分には教師として生徒を守る義務がある。

数瞬躊躇つた後、今回だけだと自分に言い聞かせ、魔法陣を展開する。

「Sed verum ad praeteritum, nec futurum est verum cognoscere  
(真理無き者に過去は無く、真実知らぬ者に未来は無い)  
Omnes scient, in desperationem, et abicit (全てを知り、絶望し、消えよ) !  
Vestibulum recessus (禁断解放) 『真理の刃』！」

白銀の光が魔物たちに降り注ぎ、貫いていく。

桜咲と龍宮はその光景を睡然として見てている。

やがて、光が収まつたとき、そこには魔物は一体として存在しなかつた。

パンドラは魔力を大量消費した疲れからくる息切れをなんとか整えようとして、むせた。

「げほつ、げほつ！？」

「せ、先生！？ 大丈夫ですか！？」

桜咲は心配して彼の背中を擦る。龍宮は呆れ顔で未だむせ続ける彼

を見た。

「 かつこ悪いな、パンドラ先生  
「ひぬわーー！ げほつ」

時刻は8時半過ぎ 既に辺りは真っ暗で、時折吹く風がひどく冷たい。

「それにしても、先生はあんな魔法も使えたんですね。知りませんでした」

「当然だろう、あれは禁 普段使う必要のない魔法だからな」パンドラは危うく言つてはいけないことを言いかけ、慌てて言い直した。

言つてはいけないこと それは、巨大な力を宿し制御が難しいため、使用はおろか習得すら禁じられた魔法、『禁断魔法』のこと。パンドラは訳あって『禁断魔法』を管理しているが、それを公言することも使用することもしてこなかつた。

何故なら、人間は手を触れてはいけないと分かつていても、時には己の私欲のために禁忌に触れようとする生き物だからだ。

そんな人間に彼が『禁断魔法』を管理していることが知れれば、双方ともただでは済まないだろう。  
ゆえに彼は隠してきたのだが、今回彼が使用したのが『禁断魔法』と分からぬようだとはい、二人もの人間の前で披露してしまつたのだ。

彼は攻撃用の魔法はあまり多くは習得しておらず、今回のことは不可抗力とも言えるのだが、彼の心中は複雑だった。

「本当にな。先生があんな魔法を使えると最初から知つていれば、援護などさせずに一網打尽にしてもらつたものを」

「何都合の良い事を言つてゐる、龍宮。そういうのを望むのなら行き当たりばつたりで私に頼むよりも、高畠先生なり他の魔法使いなりに相談しておけばよかつたんじゃないのか」

パンドラが龍宮に言い返すと、彼女と桜咲はぴた、と歩みを止めた。

「そうか、その手があつたか…」

「… そうでしたね。失念していました」

「……阿呆か」

では次はああしよう、こうしようと会議を始めた彼らを見て、『禁断魔法』について口止めをしようかと考えたが、彼女らは『禁断魔法』だと分かっていないようだったので、逆に口止めしようとすると怪しまれるだろう。

(…ま、今回はいいか。何かあれば記憶を消すなりすればいい)

心中で結論付けると、大きく欠伸をした。

満天の星空が、いつもよりも綺麗な気がしたのは果たして気のせいだつたのだろうか。

## 第5話 嵐の予感

桜咲と龍宮の仕事に付き合わされてから一週間、ほとんどの何事もなく過ごしたパンドラ。

平和な日々に満足していたが、いわゆる「嵐の前の静けさ」なのではないかと少し不安になつてもいた。

今日も全ての授業が終わり、職員室で茶を啜りながら一息ついていると、高畑がやつてきた。

「今日もお疲れ、パンドラ君」

「高畑先生、早いな。ホームルームはもう終わったのか？」

「まあね。伝えることを伝えて終わりだから」

さすがだな、と一言呟いて再び湯飲みを傾ける。

そんな彼の前で、高畑は爆弾発言じみたセリフを投下した。

「パンドラ君、突然だけど明日から教育実習生が来るよ」

「ぶつ……はあ！？」この時期にか！？

パンドラは驚いて茶を吐き出しかけるも踏みどりまつ、高畑に詰め寄つた。

「厳密にいふと、イギリスのメルディニア魔法学校を首席で卒業した子が、最終課題で日本で先生をやるんだ」

「ふーん……修行というものか……って、『子』？」

『人』でも『彼』でも『彼女』でもなく、『子』。

「こ、子供が来るのか？」

「ええと…確かに、十歳だったかな」

「十歳…………！」

最悪だ。目眩がしてきた。

パンドラは子供が嫌いだ。騒ぐし、わがままは言うし、言つことは聞かないし、物を知らないし、いつでも自分が正しいと思っている。

世界は善と悪　　白と黒で割り切れると思っている。

最後の点については今の魔法使いたちにも言える。

正義の魔法使いだの悪の魔法使いだの、お前たちは子供なのか、そうなのかと問いたいだしたい衝動に駆られたことが何度あつたことか。

「おーい、大丈夫かい？」

「あ、ああ…すまない」

嵐だ、嵐がくるぞ。とてつもない嵐が。

凄まじいほどの嫌な予感を胸に抱え、パンドラは頭痛もしてきた頭を押さえた。

翌日、頭痛薬を飲み下し、職員室で大人しくしていると、女子の叫び声が聞こえた。

「取り消しなさいよー！ー！」

この耳障りな叫び声は恐らく2・Aーのバカ、神楽坂明日菜のものだろう。

その後、高畠が窓を開け、下にいる者たちに何かを言つたと思つたら、パンドラを招いて外へと出た。

そこにいたのは神楽坂明日菜と学園長の孫娘、近衛木乃香。

そして、小さい、眼鏡を掛けた子供。

「はじめてまして、本日付けて英語授業を担当することになりました、ネギ・スプリングフィールドです」

この出会いから、パンドラは否が応でも長い戦いに巻き込まれることになったのだ。

## 第6話 ひと時の追憶

神楽坂と近衛、そしてネギ・スプリングフィールドが学園長室で話をしている間、パンドラはその部屋の外で待機していた。

高畠の話によると、その子供は高畠に代わって3学期中2・Aの担任と英語の教師をするといつ。

パンドラは副担任としてその子供をサポートすべきなのが、学園長の話まで一緒に聞く必要はないだろうと言つて辞退したのだ。

子供の魔法使い、ネギ・スプリングフィールド。

あの「サウザンド・マスター」、英雄ナギ・スプリングフィールドの息子。

だが、あの男の息子と言つてもまだまだ未熟のようだ。

つい先程、クシャミで神楽坂の制服を吹き飛ばしたので分かる。あれはクシャミで武装解除の魔法の暴走によるもの。

魔力はなかなかだが、そのような暴走を起こすのは未熟である証だ。しかし、あの子供の目標はしっかりしている。

「夢」といわれるもの。それを真っ直ぐにあの子供は持つている。

鬱陶しいのと同時に、正直羨ましい。

自分があの子供と同じような歳のときは、「夢」だの「希望」だの言つている場合ではなかった。

パンドラは今となつては遠い昔だが、鮮明に覚えていた記憶を思い起こした。

「いいか、パンドラ。お前は『パンドラ』なのだ。何時如何なる時

もそのことを忘れるな

同じような言葉を一体何度も言われたことだらう。

最初こそ責任を感じ、決意を込めて頷いたものだが、5年ほどするとさすがにうんざりしてきて、適当に相槌を打つていただけだった気がする。

『パンドラ』。

それはただの名前ではない。リンドベルム家において、最も重要な意味をなす名前。

以前は父が『パンドラ』だつたらしい。

じゃあ今、父さんは『パンドラ』じゃないの、と聞いたら、父はひどく優しい笑顔で、お前が『パンドラ』だと言うのだ。

その時はまだ、『パンドラ』とは何か、よく分からなかつた。ただ単純に己の名前というだけではないといふのは漠然と感じていた。

『パンドラ』の意味を知つたのは、10年前。

そして、いかに『禁断魔法』が危険で、人間が欲深いのかを知つたのも10年前だつた。

リンドベルム家は10年前に無くなつた。  
ある『禁断魔法』の暴走でパンドラ以外の全員が殺されたのだ。  
後々その事件について調べると、誰かが自分のため 私欲のために『禁断魔法』の封印を解いたらしい。

その誰かは分からぬ。だが、『禁断魔法』は厳重に封印してあつた。

それこそ、リンドベルムの者しか分からないようなもので。  
つまり、それから導き出される答えは一つ。

『禁断魔法』の危険性を知つていいはずのリンドベルム家の誰かが、私欲のために封印を解いたのだ。

そんな馬鹿な、とパンドラは認めたくなつたが、それが一番正しいのだ。

愚かな人間。間違つてはいるが、分かつていながらも禁忌に触れようとしている。

する。

必死に自分を正当化して、他人の忠告から耳を塞いで。間違いを侵せば、ああ、間違っていたと悔やむだけ。そして同じことを繰り返す。

正義だと大声で宣つても、悪だとふんぞり返つても、何ひとつ変わりはない。

それが10年前にパンドラが思い知った事実だった。

扉の開く音で意識を現実に戻すと、女子一人があつと言つ間に走つていった。

廊下を走るなど何度も言つても分からぬ奴らなので、彼は既に注意するのを諦めている。

そしてもう一人、小柄な人間 ネギ・スプリングフィールドが出てきた。

「あ…あの、タカミチと一緒にいた人ですよね、はじめまして」  
「へこりと丁寧にお辞儀してくる。あの英雄と違つて、態度はしつかりしているようだ。

「じ丁寧にどうも。私はパンドラ・リンドブルムだ。2-Aの副担任で、お前のサポートを命じられた」

そう、サポートという名の子供のお守り。面倒なことこの上ないが、これも仕事だ。

聞いた話によると、大学卒業程度の学力はあるという。  
知識については問題はないようだが、子供だ。  
行き先が不安で、パンドラは大きく息を吐いた。

## 第7話 開の福音のお茶会

ネギとともに2・Aに着いたはいいが、やはりこうかトラップの割には可愛いものが仕掛けた。

黒板消しトラップや上から水入りバケツが降つてくるような罠。ネギはまんまと全てのトラップに引っかかり、パンドラはその惨状を見て酷くなるばかりの頭痛で手を背けた。

「ええーー!? 子供おー!?

慌てて目を回している子供に駆け寄る生徒たち。

次いでパンドラに「これが先生ですかー!?」と言外に信じられない!といつもユアンスを含めて聞く。

うそお、とか可愛いーー!とか女子特有の高い声が飛び交う中で、パンドラは耳を塞ぎながら嘘だつたらいいのにな、と半ば本気で思つていたというのは余談である。

その後、背が小さいから黒板の高いところに手が届かないだの、何故か神楽坂がネギに消しゴムの欠片をぶつけまくつただの、いきなりクラス委員長・雪広あやかと神楽坂が喧嘩を始めるだの、結局授業らしい授業ができず大失敗だった。

昼休み。

本日の午後に彼担当の授業は無いので、のんびりと過ごしていくと2・Aの生徒である絡繹茶々丸がやってきた。

「パンドラ先生。少しそうじいですか

「絡繆が。どうした」

絡繆茶々丸はロボットだ。工学と魔法を併用して造られたと以前聞いたことがある。

「マスターがお呼びです。パンドラ先生にお聞きしたいことがあります」とのことです」

マスターと聞いて驚く。最近は彼女と特に話はしていなかつたからだ。

しかし生徒という身分で教師を呼び出すとは、何かおかしいのではないか。

ぶつぶつ言しながらも、彼はその申し出を承諾したのだつた。

二人が向かつた先は屋上だつた。

屋上に着き、彼が一番最初に目にしたものは、屋上の真ん中にデンと置かれた、丸く品のあるテーブルに添えられた椅子に足を組んで座り、誰かが見ている訳でも無かつただろうに偉そうに紅茶を飲んでいる金髪幼女の姿だつた。

「おお、来たか。パンドラ」

「エヴァンジエリン・A・K・マクダウェル：お前、こんなところで何をしている？」

「見てわからんか、茶会だよ」

言葉を失つて立ち尽くしていると、絡繆に促され、テーブルに添えられたもうひとつの中椅子に座つた。

「エヴァンジエリン、私を呼んだのは茶会を催すためではないだろう。何を聞きたい？」

精一杯優雅を意識しているような仕草で紅茶を飲むエヴァンジエリンに問う。

「ふむ。そう聞きながら貴様も大体何について聞かれるか、予想がついているんではないか？」

そう言いながら金髪幼女はパンドラの銀瞳を覗き込むように見る。

外見に似合わず古風な言い回しをし、何かと偉そうな少女。

エヴァンジエリン・アタナシア・キティ・マクダウェル。

「闇の福音」や、「不死の魔法使い」「童姿の闇の魔王」などと呼ばれ、吸血鬼の真祖であり、実に600年生きているとされる少女。そして絡繆茶々丸のマスター。

実際、19年しか生きていないパンドラを彼女から見れば、ただの赤子と同じレベルなのだろう。

しかし、今彼女は生徒で、パンドラは教師。

それを分かつていなか、それとも分かつていても気にしていないのか

彼女の性格から考へるに、明らかに後者だが。

そんな雑念を仕舞い込み、パンドラはエヴァンジエリンとの会話に集中する。

「ネギ・スプリングフィールド、か？」

にや、とエヴァンジエリンはその童顔に似合わない悪魔のような笑みを浮かべる

正解のようだ。

「そう。あのガキのことだ」

「……そんなに初恋の人気が気になるのか？　いい年して頑張るな、お前」

「なつ、ななな、なぜそつなるつ！…」

「分かりやすいな、お前」

エヴァンジエリンの初恋の人とは、ネギの父、ナギ・スプリングフィールドのことだ。

彼女が麻帆良学園に通っているのもあの男が関係しているらしい。

「貴様つ！　さてはカマを掛けたな！？」

「見事に引っ掛けってくれてありがとう。案外単純なんだな」

「ええい、普段素直に謝らんのに、こういうときに素直に謝るでないッ！」

ある場所ではなまほげと同じよつな扱いをされているような彼女に、パンドラは遠慮も何も無く言つ。

彼女はパンドラがこの学園に来たとき、最初に打ち解けた相手だつ

たのだ。

打ち解けた、というか、彼女の事情を知ったパンドラが、面白がつていろいろなことを問い合わせただけだったのだが。

始めは鬱陶しそうにしていた彼女も、パンドラの持つ魔法に関する知識や様々な物に向ける好奇心を認めてだんだんと多くのことを話すようになつたのだ。

いつだつたか、うつかりエヴァンジエリンは初恋の相手のことを口に出してしまい、それ以来事あるごとにパンドラにネタにされ続けているのだった。

彼女は昔からそのネタになると慌てふためく。

普段の彼女とのギャップが激しく、微笑ましいくらいだと考えて、思わずパンドラは薄く笑んだ。

「笑うなっ、パンドラ！」

バン、とテーブルをエヴァンジエリンが思い切り叩くと、上に置いてあつたものが一瞬中に浮いた。

その後、完全に気を損ねたエヴァンジエリンがパンドラに右ストレートをお見舞いするも軽くいなされ小馬鹿にしたような顔で笑われた、ところは別の話。

## 第8話 「課題」

「 学園長、私に何の用があるんだ?」

ネギが麻帆良学園に来てから数日。何やらいろいろとあつたらしいが、特に大きな出来事は何もなく比較的平和だった。

そんな中、期末テストまで後一週間というときにパンドラは学園長・近衛近右衛門から呼び出された。

テスト作成とひつきりなしに質問をしにやってくる生徒たちを粗手にしていて、最近は酷く疲れているのだ。

目眩や頭痛こそまだ発症していないものの、睡眠不足で機嫌が悪い。ゆえに、少しでも早くやることをやって、仕事を終わらせたいとうのに呼び出し。

表面こそ平静に見えるが、心中では罵詈雑言が渦巻いている。

「つむ。ひとつ聞くが、お主から見てネギ君をどう思つ?」

「どう思うと仰られても…頑張っているのではないか?」

パンドラの返答に、学園長はふむ、と頷く。

まったく学園長が何をしたいのか分からず、心の内で不機嫌メーターが上昇する。

「何が仰りたいのだ、学園長」

「よつはな、立派な魔法使い候補である彼に、ひとつ課題を与えようと思ったのじゃ。パンドラ君にはネギ君に伝達を頼みたい」

立派な魔法使い（マギステル・マギ）。

正義を御旗に掲げる魔法使いたちが憧れる、世のため人のために魔法を使う魔法使い。

パンドラは別にそんなものに興味はない。

だが、正義を至高とする者達にとつてその称号は何ものにも変え難いものだということを知っている。

そしてそれと同時に奴らの多くは「魔法」というものを甘く見てい

るといふことも知つてゐる。

奴らは知らないのだ。いかに「魔法」といふものが人の心に左右されるかを。

「…その課題とは?」

「パンドラ君も2・Aがクラス別成績で万年最下位だといふことは知つてゐるじゃろう? 彼には2・Aを最下位から脱出させてほしいのじゃよ」

「それはまた……無茶苦茶な課題ではないか。個人での成績ではトップ3が揃つているが、ワースト5も皆揃つているぞ」

件のバカレンジャーは幾らやつても成績が伸びない。よく見捨てもせず毎回補修をやつしているものだと自分でも思う。

「そこはネギ君と生徒たちの頑張り次第じゃの。うまくいけば教師として正式採用を考えてある」

フォフオフオ、と言つだけ言つて呑氣に笑う爺。なぜだらうか、今非常にこの洋梨頭を殴りたい。

「用件はそれだけか? ならば私はもう行くぞ」

「まあ待て、用はもう一つあるのじゃ。もう一つは、お主も関わることじや」

「…何?」

背を向けかけた体を再び学園長へ向ける。

どういうことか、と半ば睨むようにして田の前の老人を見る。

「ネギ君のもう一つの課題はお主に試験官をやつてもらいたいのじや」

「…もう一つ、だと? 一つで充分ではないのか?」

「恐らくネギ君は正式採用されるじゃろう。問題はその後じや。ネギ君は大なり小なり苦労はあつたようじやが、全てが上手くいつておる。このままではいけないのじゃよ」

「世の中には失敗もある、上には上がいるための課題だというのか?」

「フォフオフオ、理解が早くて助かるわい」

それを分からせる

この意見には賛成だ。どんなに眞面目な人間であれども、少しある成績が続くと天狗になるものだ。

だが、この話を今するのはあまり適切ではないだろう。

「私に異存は無いが、学園長、なぜネギ・スプリングフィールドが最終課題をクリアし、正式採用されると思っている？ 単なる希望的観測か？ それとも何か根拠でもおありなのか？」

「つむ…両方じやの」

そうだった。ここつむはそういう人間だった。人間を理屈抜きで信じられる人間。

それがどうにも理解出来ず、出会った当初はイライラしていた。

「はあ…。では、学園長。その“ネギ・スプリングフィールドが正式採用された後にやる課題”で、私は一体何をすればいい？」

「一言で言つと、決闘じや」

「なつ…け、決闘！？ 学園長、本気なのか！」

「もちろん。本気と書いてマジと読むくらいにな」

数日ぶりに眩暈と頭痛が再来してきた。将来自分の死因は案外眩暈や頭痛だったりするのではないかと最近よく考えるようになった。

「学園長も知つていいとは思うが、私が得意なのは結界と捕縛と探知だ！ 攻撃用などほとんどないんだぞ！？」

「だからこそ、今の内に知らせたんじやよ。準備期間じやよ、準備期間」

そんな無茶な。

「準備期間をもうけるくらーなら、高畑先生や学園長自身が相手をすればいいだろつ！」

「わしらは忙しいんじや。これも副担任の仕事じやよ、パンドラ先

生

ここで副担任といつ立場を持つてくるか。わざとらしく先生とまでつけて ことん喰えない爺だ。

だが、学園長の次の言葉で、怒りで温度が急上昇していた心が一気に凍てついた。

「まあ、事と次第によつては、『禁断魔法』の使用許可も出すぞい」

「黙れ……」

突然の怒鳴り声に、学園長は瞠目する。

「使用許可も出す、だと？　お前に、お前たちに『禁断魔法』を使うか否かを決める権利があるとでも思つてゐるのか？　はつ、勘違いも甚だしいな！　決めるのはお前たちではない。『パンドラ』であるこの私だ！」

こいつらは分かつていない。『禁断魔法』という存在を。自分たちの都合で生み出しておきながら、管理することも責任を取ることも放りだしたこいつらは、何も分かつていない。

「…お主は『禁断魔法』を使つことを嫌つておつたな。じゃが、ならなぜ数日前使つたのじゃ？」

「あれは私の教師としての判断だ。守れる生徒を守らないで、教師が務まるか。ここで咎められるは、『禁断魔法』を使用した私ではなく、仕事とはいえ生徒を駆り出さなければいけないまでに、事態を悪化させたお前たちではないのか？」

学園長は沈黙する。あくまで肯定しようとしたい学園長に、いい加減堪忍袋の緒が切れそうだ。

「とにかく、お前たちの指図は受けない。確かに高畠先生には世話になつたからな、感謝はしてゐる。だが、それとこれとは話が別だ。私はお前たちを否定はしないが、決して肯定もしない」  
忘れるなよ、正義の味方気取りさん　　と、言い残し、パンドラは靴音高く退室した。

パンドラが退室し、静けさが室内に漂つ中で、学園長は短く嘆息した。

「今代の『パンデラ』は、一際意志が強いのも  
その独り言は、誰にも聞かれることもなく空氣に溶けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2145ba/>

ネギま！ 禁じられた魔法を統べる者

2012年1月12日22時52分発行